

[外国語]

進んで文字を読もうとする意識を育む「読むこと」の研究

— ジョリーフォニックスを用いた指導を通して —

高橋 遼*

1 主題設定の理由

(1) 研究の背景について

小学校学習指導要領の改訂により、2020年4月から小学校高学年に外国語科が導入された。文部科学省(2017)は、その背景となる課題を「外国語活動で、音声中心で学んだことが、中学校段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていないなど、外国語活動での学びがうまく中学校英語教育に生かされていない」としている。これを踏まえ、新学習指導要領では、中学年において「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ、高学年において文字を「読むこと」「書くこと」を加えた外国語科を行うことで、中学校への接続を図ることが求められている。その中でも、とりわけ文字を「読むこと」の指導については、英語を読むことの困難さに留意し、慎重に進めなければならない。

尾上(2017)は、「英語の音声と文字を結び付けることは困難であり、それが中学生の英語学習におけるつまずきの一つである」と述べ、「読むこと」を指導することの難しさについて指摘している。音声で聴けば意味が分かる単語も、文字で提示された場合には読むことができなくなってしまう中学生の様子から、小学生にふさわしい音声と文字の関係を学ぶ方法の開発を喫緊の課題としている。野呂(2004)は、中学校で英語が嫌いになる一つの理由を「英語が読めないこと、読めないで英語が覚えられないこと」としている。そして、そのような子どもを少なくするための解決策として、「英語圏の国語教育で使われているフォニックスを日本の英語教育にも導入する必要がある」と述べている。フォニックスを学習することによって、中学校での音読や文字指導において学習者のつまずきが少なくなるというメリットを挙げている。

フォニックスの学習については、様々な先行研究により有効性が確認されている。木澤(2018)は、実際の小学校教育現場におけるフォニックスの実践と効果の測定を行うことが急務として、フォニックスの効果検証を行った。その結果、発声の正確さや、単語や文字を音に変換するデコーディング課題の成績の向上、文字と音の対応の定着などが確認された。山見(2016)は、小学校5、6年生のクラスでフォニックス指導を行い、その有効性を考察した。子どもたちが音と文字の関係に興味をもち、英語を読むことに意欲が湧いたことから、文字と発音の関係を明示的に指導するフォニックスの有効性が示唆された。戸谷(2017)は、フォニックスに関連する文献を分析し、その有効性や可能性について検討した。発達段階に合わせた指導法を工夫すれば、小学校中学年での「外国語活動」、高学年での「外国語科」ともにフォニックス指導が有効であると解釈した。これらの先行研究から、フォニックスによる音声指導を行うことで、学習者の技能的側面および意欲的側面において効果があることが分かっており、今後、英語教育の場で広く活用されることが一層期待されている。

(2) ジョリーフォニックスについて

フォニックス指導の一つに、ジョリーフォニックス(以下ジョリー)がある。ジョリーとは、文字(綴り)と音の関係を視覚や聴覚、運動感覚等の多感覚を使って身に付けさせる指導方法である。指導には絵本が使われ、文字と絵柄が「文字の音」を印象付けるものになっていて、視覚を使って学習できる。また、絵本の話には、そこで学ぶ「文字の音」が何度も登場するため、聴覚を使って学習できる。加えて、それぞれの音には体を使ったアクションが設定されており、運動感覚を使って学ぶこともできる。ジョリーは世界120か国以上の学校で採用されているプログラムである。

現在勤務している新潟県南魚沼市では、2009年度から市内の全小学校が教育課程特例校に指定され、「国際理解教育」

*南魚沼市立六日町小学校

と「英語教育」を合わせた「国際科」の授業が実施されている。2016年度からは、試験的にジョリーの指導が導入され、外国語指導助手（以下ALT）が主導し、授業を担当する教員がサポートする型で授業を展開している。指導は、国際科の前半に10～15分程度で1音を扱っている。これらは、音声から文字への学習の円滑な接続をねらいとして行われており、小学校でのジョリーの学習が中学校での英語学習に生かされることが期待されている。ジョリーの指導を受けた児童の中には、初めて見る単語でも既習の音で作られた単語であれば、ジョリーの学習を思い出しながらかくことができる児童もいる。しかし、そのような姿はジョリーの指導中が大半であり、授業の主活動の中ではあまり見られない。

現在担当している小学校6年生58名を対象に、筆者が行った5段階評定尺度形式の意識調査によれば、「外国語科で英語を読むときにフォニックスを使って読もうとしていますか。」という質問項目に対し、「5：はい」や「4：少しはい」と肯定的に回答した割合は全体の約64%にとどまった。肯定的な回答をしなかった児童の自由記述欄には、「読めないことがあるから。」や「覚えていないから。思い出せないから。」という2つの理由が多く見られた。この調査結果から外国語科で扱う教科書の単語の多くが既習のジョリーのルールでは読むことのできない単語であるため、ジョリーの既習事項を使って英語を読もうという意識が薄れてしまっているという実態が分かった。また、既習の音で作られた単語であってもジョリーの42音を思い出すことに困難を抱えていることが分かった。そこで、これらの課題を解決し、既習のジョリーの学習を生かして英語を読もうとする児童の姿を具現するためには、外国語科の「読むこと」の指導方法を改善する必要があると考えた。

2 研究の目的

「読むこと」の学習場面においてジョリーを用いた指導を行うことで、既習のジョリーを生かして英語を読もうとする児童の姿が具現することを、実践を通して明らかにする。

3 研究の方法

(1) 対象児童

小学校 6学年 児童数62名（6年A組31名，6年B組31名）

なお、意識調査票の対象は、事前と事後の両方を受けた58名（6年A組28名，6年B組30名）とした。

(2) 実践期間及び実践者

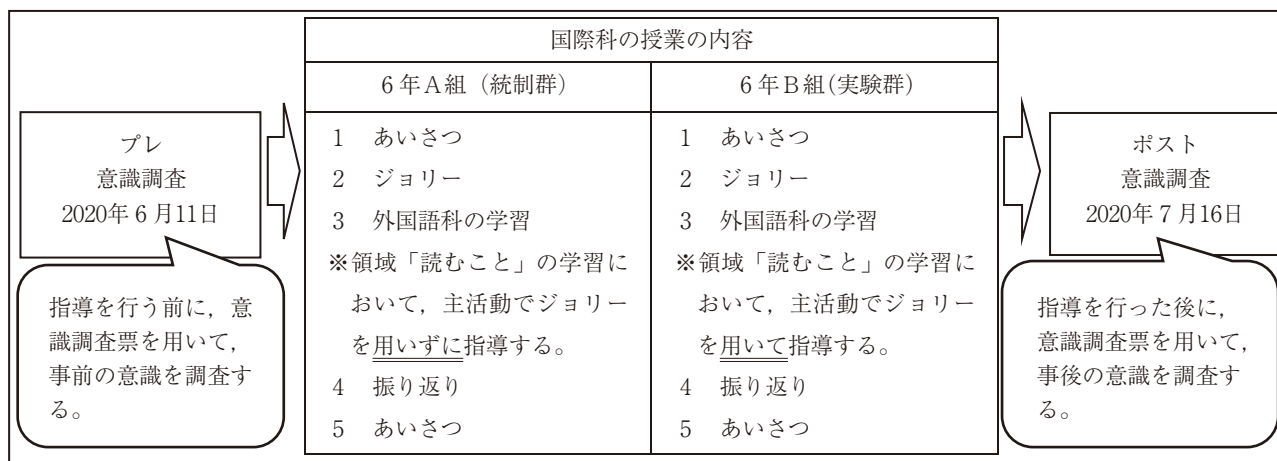
2020年6月11日～7月16日に実施した。毎週2回の国際科で実施し、筆者とALTで指導を行った。

(3) 調査材料

筆者が作成した意識調査票を用いた。設問は、「外国語科で英語を読むときにフォニックスを使って読もうとしていますか。」として、回答方法は【はい、少しはい、どちらでもない、少しいいえ、いいえ】の5件法とした。また、理由を書く自由記述欄を設けた。

(4) 調査方法

調査方法は、図1の通りである。



<図1 調査方法の概要図>

(5) 指導の内容

外国語科の授業の中で、以下の2つの手立てを行った。

① ジョリーを使って教科書で扱う単語を読む時間を設定する。

実践前の意識調査で「外国語科で英語を読むときにフォニックスを使って読もうとしていますか。」の質問項目に対し、肯定的な回答をしなかった理由として、「読めないことがあるから。」という記述が多く見られた。これは、教科書で見られる単語の多くが既習のジョリーのルールでは読むことのできない単語だからである。

そこで、毎時間の授業で取り扱う単語の中で、既習のジョリーで読むことができる単語を2～3個取り上げ、ジョリーを使って読む時間を設定した。読む際は、単語を構成する文字の音を一音ずつ確認した後、文字と文字とを結び付けて発音するブレンディングの指導を中心に行った。音ボタンを単語の下に赤点で示したり、アクションをしながら読ませたりした。(表1参照)

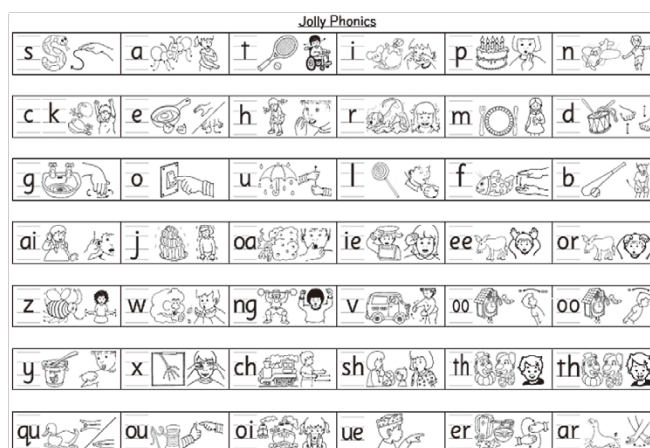
<表1 実験群(6年B組)で取り上げた単語>

取り上げた単語
book / shop / zoo / can / in / it / class / Japan / think / Bill / sweet / festival / spring / about / fun / tree / moon

② ジョリーの一覧表を掲示する。

実践前の意識調査で「外国語科で英語を読むときにフォニックスを使って読もうとしていますか。」の質問項目に対し、肯定的な回答をしなかった理由として、「覚えていないから。思い出せないから。」という記述が多く見られた。これは、既習のジョリーの音が全部で42音と非常に多いため、それぞれの音を思い出すことが困難だからである。

そこで、音を思い出す手がかりとなるように、ジョリーの指導で掲示している42音の一覧表を黒板に掲示した。なお、この一覧表は、ジョリーラーニング社の「Jolly Phonics Resources CD」を参考にして、南魚沼市教育委員会が作成した一覧表である。(図2参照)



<図2 ジョリーフォニックス42音の一覧表>

4 研究の結果

(1) 意識調査

意識調査票の質問項目「外国語科で英語を読むときにフォニックスを使って読もうとしていますか。」に対し、「5: はい」や「4: 少しはい」と肯定的に回答した全体の割合は、事前から事後にかけて約64%から約72%に上昇した。(表2～3参照)

<表2 事前の意識調査における回答(統制群N=28, 実験群N=30)>

	選択肢				
	5: はい	4: 少しはい	3: どちらでもない	2: 少しいいえ	1: いいえ
統制群 (A組)	7	11	2	5	3
実験群 (B組)	11	8	3	4	4
全体	18	19	5	9	7

<表3 事後の意識調査における回答（統制群N=28, 実験群N=30）>

	選択肢				
	5: はい	4: 少しはい	3: どちらでもない	2: 少しいいえ	1: いいえ
統制群 (A組)	8	11	3	3	3
実験群 (B組)	12	11	3	2	2
全体	20	22	6	5	5

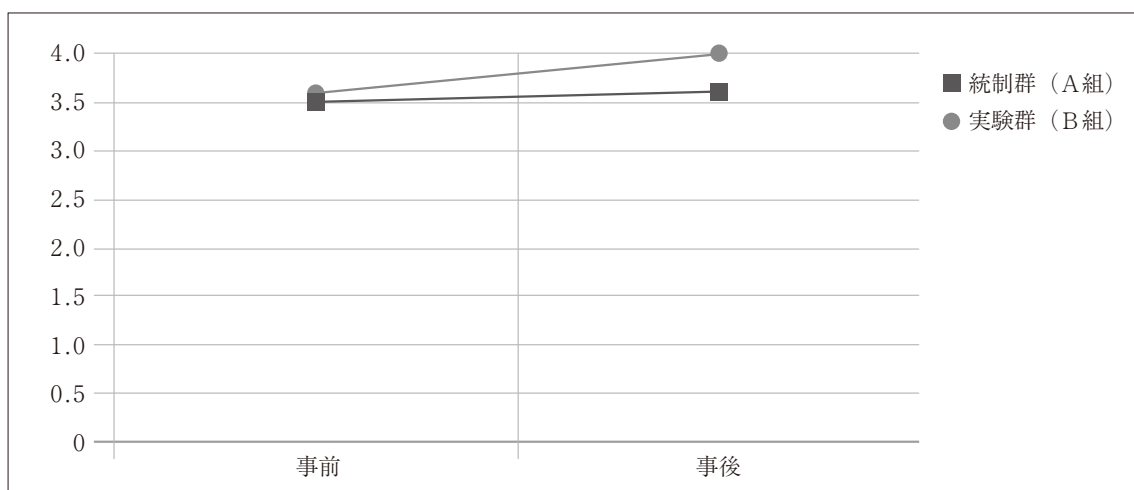
事前事後間と群間の差を明らかにするため、意識調査の得点について、事前事後間（事前・事後）×群間（統制群・実験群）の2要因の分散分析を行った。その結果、事前事後間・群間の有意な主効果および交互作用は確認されなかった。（表4～5、図3参照）

<表4 意識調査における事前事後間と群間の得点の平均と標準偏差（統制群N=28, 実験群N=30）>

		事前		事後	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差
意識調査得点	統制群 (A組)	3.5000	1.3229	3.6429	1.2877
	実験群 (B組)	3.6000	1.1283	3.9667	1.1686

<表5 事前事後間×群間の意識調査得点 分散分析結果>

	平方和	自由度	平均平方	F値
群	1.3007	1	1.3007	0.48 ns
誤差 (群)	150.3976	56	2.6857	
事前事後	1.8800	1	1.8800	2.23 ns
事前事後間×群	0.3627	1	0.3627	0.43 ns
誤差 (事前事後)	42.1976	56	0.8428	
全体	201.1386	115		



<図3 意識調査の平均得点の変化>

(2) 自由記述

意識調査において、実験群で事前から事後にかけて得点が上昇した児童の自由記述の内容が表6である。なお、()内の数字は意識調査の回答番号を表している。

＜表6 実験群で事前から事後にかけて得点が上昇した児童の自由記述（下線は筆者による）＞

児童	事前	事後
D	習った文字を <u>読みたい</u> から。自分自身でいろいろな言葉を読んで <u>読みたい</u> と思ったから。(4)	<u>前には読めなかった英語が読めそう</u> だから。読んでみたいなと思った。(5)
E	読もうとしていることもあるし、 <u>読むのが面倒くさい</u> 時もあるから。(3)	読んで <u>読めると面白い</u> けど、 <u>読めないことが多い</u> から。(4)
F	普通にすらすら <u>アクションを読みながら</u> すると、 <u>意味が分からなくなったりする</u> から。(1)	<u>使うと読みやすくなる</u> から。(4)
G	<u>難しい</u> から。(1)	フォニックスを使うと <u>分かりやすい</u> から。(4)
H	読むのはみんな <u>読みたい</u> から。(2)	その英語を <u>読んでみたい</u> から。(4)
I	英語が <u>苦手</u> だから。(1)	英語が <u>少し苦手</u> だから。(5)
J	やっていることに集中したり、無意識的に他のことを <u>読んでしまったり</u> してあまり目に付かない。(2)	いろいろな経験を無駄に <u>したくない</u> し、いろいろなことを <u>知っておきたい</u> から。(4)
K	せっかくフォニックスを習ったから、 <u>使って読もうと</u> 少し思っている。(4)	読みたい英語があるから、フォニックスを <u>使って読もう</u> としている。(5)

また、実験群で事前事後ともに「2：少しいいえ」「1：いいえ」と回答した児童の自由記述の内容が表7である。なお（ ）内の数字は意識調査の回答番号を表している。

＜表7 実験群で事前事後ともに「2：少しいいえ」「1：いいえ」と回答した児童の自由記述（下線は筆者による）＞

児童	事前	事後
L	フォニックスが <u>苦手</u> だから。(2)	フォニックスとか英語が <u>苦手</u> だから。(2)
M	難しいし、英語が <u>苦手</u> だから。(2)	フォニックスが <u>分からない</u> から。(2)
N	塾で習っていて、塾で習ったやつが学校では <u>少し遅れて</u> 習うから。(1)	名前を覚えているやつは <u>すぐに</u> 言えて、 <u>分からない</u> やつは読んでいないから。(1)

5 考察

意識調査票の分散分析では、実験群の事前から事後における得点に有意な差が確認されなかったことから、実験群全体の意識の有意な上昇は確認できなかった。加えて、事前事後間（事前・事後）×群間（統制群・実験群）の2要因の分散分析の結果から、事前事後間・群間において有意な主効果および交互作用も確認できなかった。ここから、本実践において行った2つの手立てが、児童全体の意識を上昇させたとは言いがたい。

しかし、意識調査票の結果からは、ジョリーを使って英語を読もうとする肯定的な回答をする児童が増え、同時に意識調査得点の平均点も増えたことが分かる。つまり、事前に肯定的に回答した児童の多くは事後でも肯定的に回答し、事前に肯定的に回答しなかった児童の一部が事後において肯定的に回答した。事前から事後にかけて得点が上昇した児童の自由記述を見てみると、本実践の手立てが、一部の児童の意識に正に作用した可能性が見て取れる。

児童Dは、事前には「習った文字を読みたい」と記述し、読んだことのある言葉を読もうとする意識が強かったことが分かる。しかし、事後には、ジョリーを使って読むことで「前には読めなかった英語が読めそう」という意識に変化した。つまり、読んだことのない単語でもジョリーを使えば自分の力で読める言葉もあることに気付いたと推測される。本実践では、事前の意識調査で「読めないことがあるから。」という記述が見られたことから、既習のジョリーで読むことができる単語を2～3個取り上げ、ジョリーを使って読む時間を設定した。この手立てが、教科書で扱う単語の中にもジョリーのルールを使えば読むことができるものもあるということに気付かせるきっかけになったと推測される。

児童Eは、事前には「読むのが面倒くさい」という理由を記述していた。単語を読むために、一字ずつ音を思い出しながら読むことに困難さを感じていたと考えられる。しかし、事後には「読めないことが多い」としつつも「読めると面白い」と記述しており、進んで読もうとする意識が高まったことが分かる。児童Fは、事前にはアクションとともに音を思い出すことに難しさを感じていた。しかし、事後にはその難しさが解消され、分かりやすさが高まったことが分

かる。児童Gも同様に、ジョリーで読むことへの難しさが解消され、分かりやすさに気付くことで意識が大きく高まっている。本実践では、事前の意識調査で「覚えていないから。思い出せないから。」という記述が見られたことから、ジョリーの42音の一覧表を黒板に掲示した。この一覧表が、音を思い出す困難さや、読むことへの抵抗感を軽減させたのではないかと推測される。

一方で、児童Lや児童Mのように、困難さが解消されず、読むことに対する意欲が向上しなかった児童もいる。自由記述欄の内容から今回の実践の課題である「読めないことがあるから。」や「覚えていないから。思い出せないから。」とは別の課題を抱えていることが推測される。つまり、全ての児童の進んで文字を読もうとする意識を高めるためには、本実践で行った手立てだけでは不十分だということが考えられる。これは、前述の意識調査票の分散分析において、事前事後間・群間において有意な主効果および交互作用が確認できなかったことから明らかである。「読めないことがあるから。」や「覚えていないから。思い出せないから。」とは異なる困難さを抽出し、それらに沿った手立てを加えることで、より多くの児童の読むことに対する意識を高めることができると考えられる。

6 まとめと今後の課題

本研究では、「読むこと」の学習場面においてジョリーを用いた指導を行うことで、既習のジョリーを生かして英語を読もうとする児童の姿が具現することを検証した。分析の結果、ジョリーを使って読むことに対する困難さが解消されることで、文字を読もうとする意識の変容が確認できた。特に、初めて見る単語でもジョリーを生かして読もうとする意識が低い児童や、ジョリーの42音を思い出すことが苦手の児童に対して、本実践の手立てが有効だった。

しかし、意識に変容が見られなかった児童も確認されたことから、その困難さを抽出し、それに沿った手立てを検証することが必要である。また、本実践では意識調査として自由記述欄を設けたが、児童の抱える困難さをより具体的に調査するためには、意識調査票の内容を再度検討する余地もある。加えて、より正確に児童の実態を把握したり変容を分析したりするためには、定期的な意識調査や長期的な実践が不可欠である。

引用・参考文献

- 尾上利美「小学校英語教育へのフォニックス導入に関する一考察」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第67集, 2017年, 75~80 pp
- 木澤利英子「シンセティック・フォニックス指導とその効果－児童の非単語反復及びデコーディング力に着目して－」『関東甲信越英語教育学会誌』32巻, 2018年, 71~84 pp
- 戸谷敦子「小学校英語教育における音声指導についての予備的研究」『広島都市学園大学 子ども教育学部紀要』第4巻第1号, 2017年, 35~41 pp
- JollyCommunicationCentre株式会社「ジョリーフォニックス (Jolly Phonics) とは」『JollyCommunicationCentreホームページ<<https://jollycc.com/jolly-phonics/>>』2020年12月18日参照
- ジョリーラーニング社「指導の流れ」『はじめてのジョリーフォニックス－ティーチャーズブック－』, 2017年, 18~27 pp
- 野呂忠司「小学校の『英語活動』における文字指導の意義と必要性」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第7号, 2004年, 151~157 pp
- 南魚沼市教育委員会学校教育課「国際科では何をするの?」『南魚沼市ホームページ<<http://www.city.minamiuonuma.niigata.jp/kosodate/kyouiku/kokusaika/tokurei/1455423661185.html>>』2020年8月4日参照
- 文部科学省「小学校外国語教育(外国語活動・外国語)の基本理念」『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』, 2017年, 12~13 pp
- 山見由紀子「小学生へのフォニックス指導の有効性－小学校5, 6年生へのフォニックス指導の実践(アクションリサーチ)－」『中部地区英語教育学会紀要』45号, 2016年, 251~256 pp